はぐくむ

✉seikatsu@asahi.com
土曜掲載

全国で保育施設の定員拡大が進み、待機児童が大きく減るなか、保育園はいま、「量」だけでなく、「質」の確保が求められています。しかし、「保育の質」とは？　なかなか数値化しにくく、改善されにくいこのテーマについて、新潟県私立保育園・認定こども園連盟が、調査研究を行っています。報告書からは、なぜ子どもたちに手厚い保育士の配置が必要なのか、具体的に知ることができます。

保育士の配置 手厚くしてみたら

先生1人に1歳児6人→3人 新潟の16園で影響を比較

保育園の1歳児クラスでの給食の時間。6人の子どものうち1人が、同じテーブルに座る保育士に向かって何度も「いないないばあ」をしてみせた。だが保育士は、テーブルの対角線上にいる子どもの介助に手一杯っぱいで気がつかない。しばらくすると、その子は諦めた様子で保育士の気を引くのをやめ、黙って食事に戻った――。

見直し求める声

連盟が昨年実施した調査研究での一コマだ。子どもに対する保育士の配置は厚生労働省が基準を定めており、例えば1歳児なら、子ども6人につき1人以上の保育士を配置することになっている。

しかし現場の保育士からは、「保育園に求められる役割は複雑化しており、実態に合わない」などとして見直しを求める声があがっていた。

研究は、保育士配置が子どもたちに与える具体的な影響を探ろうと、県内の認可保育園など16園の協力を得て実施。給食の時間に、保育士1人が1歳児3人をみる場合と6人をみる場合の様子をそれぞれ10分間録画・録音し、保育士が子どもに話しかけた回数を比較した。

参加した保育士27人分の映像と音声を分析したところ、3人の場合、最も多かった子には平均で86・3回、最も少なかった子には41・7回の声かけがあり、その差は2・1倍だった。一方、子ども6人の場合ではそれぞれ61・6回と12・4回で、差は5・0倍に広がった。

最も差が大きかったケースをみると、子ども3人の場合は4・6倍（160回対35回）だったが、6人の場合は18・7倍（54回対3回）に広がった。6人の場合、差が10倍以上になったケースが6件と全体の2割に上り、いずれの場合も、最も声かけが少なかった子には10回以下しか声がかかっていなかった。

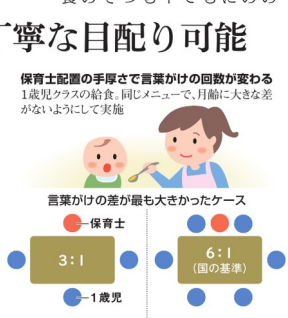
関わりたくても

報告書は「6対1では十分な関わりができないだけでなく、関わりがほぼなされない子どもが出ることも明らかになった」と結論づけた。話しかけた言葉の内容の分析や、配置を4対1にした場合の研究も進め、国の配置基準の見直しにつなげたいという。

参加した保育士(26)は「6対1の場合は、すべての子どもに丁寧に関わりたいと意識していても、一番遠い席の子は視界に入りにくく、話しかけることが難しかった。お茶をこぼしても他の子に対応している間はすぐにはかけよれず、もどかしかった」。別の保育士(24)も「子どもたちは声をかけると喜んで、頑張って食べようとする。一人ひとりにより丁寧にかけるのは、6対1では難しい」と振り返る。

報告書でも、子どもの情緒への影響を心配したり、「誤食の危険に気付きにくくなる」など、子どもの命に直結する懸念を示したりする声が紹介された。（伊藤舞虹）

保育士配置の手厚さで言葉がけの回数が変わる
1歳児クラスの給食。同じメニューで、月齢に大きな差がないようにして実施



言葉がけの回数や質アップ／死角減り 丁寧な目配り可能

こたえ 折り目正しい

着物をたたむとき、折り目を間違うときちんとたためなくなってしまう。そんなことから、折り目が「礼儀作法」を意味するようになったよ。

3813

◆記事への感想や体験、「キミとどた♥ばた」で読みたい書き込みについてお寄せ下さい。住所と電話番号、名前を書いて、〒104・8011朝日新聞文化くらし報道部「子育て」係へ。ＦＡＸは03・5540・7354。メールはseikatsu@asahi.comへ。子どものつぶやきは「あのね」係まで。メールはkodomo@asahi.comへ。